

ナベグロヅル〔鍋黒鶴〕

分類／自然状態でナベヅルとクロヅル（★）が交雑した個体を通称「ナベグロヅル」と呼び、種としては数えないため、学名等ありません。

分布／毎冬ナベヅルやマナヅルとともに鹿児島県出水市に少数が渡来します。その他の地区では迷鳥であることが多いです。今季11月下旬には幡多地区で32年ぶりに確認されました。

すがた／体はナベヅルに似ていますが少し大きく約110cm。色はナベヅルより淡い灰色をしています。のどから頸にかけて黒いものもいるといわれています。

生態／雑食性で、草の葉や種子、湿原に棲む昆虫や魚、カエルなどを食べます。

★クロヅル（*Grus grus*）は体全体が白っぽく灰色をしたツルです。ユーラシア大陸の広い範囲に繁殖するため、詳しい生息数はわかっていませんが、少なくとも20万羽はいると推定されています。おもな越冬地は南ヨーロッパやインド、中国などで、鹿児島県出水市では毎年数羽が確認されます。

※参考：ふるさと出水（出水の動植物図鑑） URL http://www.synapse.ne.jp/satumaizumi/a_and_p/aandp.html



ツルの越冬をサポート

越冬中のナベヅルに給餌を行いました

今季は当会の念願がかない、幼鳥4羽を含む9羽のナベヅルの越冬が見られました。

ツルは、越冬中はおもに田に残っていた二番穂（稲刈りをした後の株から茎が伸びた稲穂）を食べていましたが、2月上旬から農作業が始まったことなどもあり、二番穂がなくなってしまいました。

そこで当会では、中筋川流域の農道などへモミや雑穀などの餌を撒き、ツルが食糧危機に陥らないようにサポートしました。ツルは警戒心が非常に強いため、初めのうちは撒いた餌を食べようとはしませんでした。しかし、地道に給餌活動を続けた結果、2週間ほどして警戒心の薄い幼鳥が餌をついばみ始めました。そしてその後、成鳥も食べるようになりました。

ツルは安心して餌を食べられるとわかった場所には翌年も訪れるのだとか。来年の飛来や越冬に期待が持てます！



給餌した餌を食べるナベヅル

ツルを見かけたら お願い



四万十川および中筋川流域で見られるツルは野鳥です。非常に用心深く常にあたりを警戒しています。特に光や物音に敏感で、一度飛び立つと遠くに飛び去ってしまい1羽も見られなくなります。自然のままのツルの生活をおびやかさないように、静かに遠くから見守って下さい。

四万十つるだよりに関するお問合せ

四万十つるの里づくりの会事務局

〒787-0029 高知県四万十市中村小姓町46 中村商工会議所内
tel:0880-34-4333 / fax:0880-34-1451
mail:naka10@cciweb.or.jp



ツルの里づくり先進地、 山口県八代地区に行ってきました

山口県周南市八代地区では、ナベヅルの保護活動と農業振興の両立に向けた取り組みが行われています。その活動を紹介する現地視察会とシンポジウム（「ツルが舞う豊かな農村を考えるシンポジウム」、主催：八代地区自然再生協議会）が平成21年1月31日に開催され、会員9名で参加しました。

八代地区には明治時代よりツルが訪れ、ピーク時には300羽を超える越冬が確認されていました。しかし、近年その数が激減しているため、地域の協力のもと、冬でも田に水を張ってツルが過ごす湿地を確保したり、ツルを驚かさないように、越冬中は農道やえさ場となる田の周辺を立ち入り禁止にしていました。また、電柱や農産物の袋などさまざまなところにツルの写真やイラストを入れ、地元のPRのために積極的にツルを活用していました。

シンポジウムでは、地元の農業者の方が「農薬の5割減など安心安全な米づくりでブランド化を目指していくことがツルの越冬数の増加につながる」と、農業と環境保全のつながりについて確信を持って語っている様子がとても印象的でした。



シンポジウムの参加者は約200名。地元の方もたくさん参加していました



現地視察の参加者は約50名



天然記念物の碑（八代地区は大正10年に天然記念物に、昭和30年には特別天然記念物に指定されています）



冬でも水を張っている田にはツル以外にもさまざまな鳥が餌を取りに降りています（矢印が越冬中のナベヅル）



当会の多和会長（左）も積極的に質問

現地視察では驚きの連続!!
八代地区の具体的な取り組みについては
中面をチェック